

## 打ちこわされし者たち

### ―百姓一揆後の地域社会における「外聞」と「遺恨」

林進一郎

キーワード…一揆／打ちこわし／千人講騒動／飯田藩／地域社会

#### はじめに

本稿は、百姓一揆において打ちこわしを受けた者（便宜的に「打ちこわし被害者」と呼ぶ）の〈その後〉の意識と行動を考察するものである。これは、百姓一揆が〈その後〉の村や地域に与えた影響、いわば社会的影響<sup>①</sup>を多角的に捉えるためのひとつの試みである。かかる試みは、昨今の百姓一揆研究の低迷状況をふまえ、その活性化を図るためのひとつの方法として、近世村落史研究・地域社会論との接合を意識したものである<sup>②</sup>。

百姓一揆は、「百姓成立」を求める集団的な訴願行為であるが、その歴史的意義として、近世の政治支配に対する「掣肘力」が指摘されている。深谷克己氏は、「近世の百姓一揆は、実際に起こった百姓一揆のたんなる総和ではない。百姓一揆の歴史的意義は、事実としての百姓一揆以上の政治的な圧力を近世政治史に及ぼしつつあったことである」として、「近世政治の底部に抑止・掣肘力として装填された百姓一揆」という見方が必要であること

を指摘している。<sup>③</sup>

一方で、百姓一揆では強訴などの領主への訴願行為のほかに、社会的制裁としての打ちこわしが行われた。ここ  
で打ちこわしの対象とされた人びとは、主に豪農や富商家、村役人層であり、それは富の独占・不正な商業行為に  
対する制裁や、領主への内通など百姓的世界から逸脱した行為に対する制裁を意味した。<sup>④</sup> 打ちこわしには、打ちこ  
わす側に強い正当性観念が存在し、ゆえに正当な理由の無い打ちこわしについては、損害賠償が求められることも  
あったとされる。<sup>⑤</sup>

従来の百姓一揆研究においては、打ちこわしが〈その後〉の社会における「掣肘」として、豪農や富商家、村役  
人層らの行動を規定したことが論じられてきた。例えば、世直し騒動では、打ちこわし後、各村において質物返還  
や米金の施行をめぐる村方騒動が展開したり、質物の無償返還が行われたことが明らかにされている。<sup>⑥</sup>

また、近年の研究でいえば、今村直樹氏が明治一〇年（一八七七）阿蘇一揆後の地域社会における「付ケ火」を  
検討する中で、「このように「徳義」を重んじ、通俗道德的であった富裕層の行動の有力な背景には、地域リ  
ダーとしての自意識とともに、地域社会から求められた「あるべき富裕者」像を破ったときに向けられる、自宅へ  
の打ちこわしや「付ケ火」への危惧があったと考えられる。実際、阿蘇一揆で打ちこわしにあった富裕層の家屋で  
は、一揆の際に鉋などで傷つけられた柱が、そのままの形で後年まで残されていた事例が多い。これは、富裕層が  
かつての一揆で受けた不名誉な制裁を記憶する象徴として、地域住民への反省的な意味を込め、あえて残し続けた  
ものではなからうか」と述べている。<sup>⑦</sup>

ここで今村氏は阿蘇一揆後の富裕層の行動を規定していた要素として阿蘇一揆の打ちこわしや「付ケ火」の影響  
を指摘するとともに、打ちこわし被害者の家で打ちこわしの跡が残されていることに積極的な意味を見出してい

る。こうした指摘は百姓一揆の意義や評価にとって重要な論点であり、私もそれを否定するものではない。しかし、百姓一揆の「掣肘」をめぐるこれまでの研究では、必ずしも打ちこわし被害者の〈その後〉の動向が具体的に明らかにされているわけではない点に注意が必要と思われる。

もとより、これまでの研究では十分に掘り下げられてこなかったが、打ちこわし後の被害者と加害者との関係はどのようなものであったのか。打ちこわし被害者は〈その後〉どのような意識を抱えて生きていったのか。こうした問いは、「掣肘力」としての打ちこわしの影響を論じる前提として問われて然るべき問題ではないかと考える。

この点で注目されるのは、保坂智氏の一連の研究である。保坂氏は百姓一揆の作法論のなかで、都市の打ちこわしでは参加者が「正体を隠す出立」を行っていたこと、天保期には農村を舞台とする一揆においてもそれが確認できるようになること、「打ちこわしが身近な生活圏の中で行われ、顔見知りの関係であったことから、正体を隠す必要が存在していたこと」を指摘しており、これは参加者の意識の問題のみならず、〈その後〉の人びとの関係を考えていくうえで重要な指摘である。<sup>8)</sup> また、百姓一揆後の村について「打ちこわしをするのは百姓であるが、打ちこわされるのもまた百姓である。一揆時の敵と味方が同じ村のなかに住み、しかも共同体としての村の機能を維持しなければならぬのである」と打ちこわし後の村における問題の所在も指摘しており、この点も百姓一揆の社会的影響を考えていくうえで重要な指摘であると考ええる。<sup>10)</sup>

ただし、保坂氏の研究は作法論・義民論の観点から指摘されたものであり、打ちこわし被害者と加害者の〈その後〉の関係や、打ちこわし被害者の意識そのものは分析の俎上に載せられてはならず、なお検討すべき課題として残されている。<sup>11)</sup>

以上をふまえて、本稿では打ちこわし被害者の〈その後〉の意識と行動を明らかにし、もって百姓一揆の社会的

影響の一端に迫りたい。なお、本稿では宝暦一二年（一七六二）に信濃国飯田藩で発生した千人講騒動を事例とする。

## 一 宝暦一二年飯田藩千人講騒動について

千人講騒動とは、飯田藩郡奉行黒須楠右衛門が発案した「千人講」と呼ばれる御用金徴収の施策を契機として発生した強訴・打ちこわしである。飯田藩領では城下を流れる松川の以北を上郷（二三か村）、以南を下郷（一五か村）と呼び、各々に代官が置かれていた。千人講騒動は宝暦一二年（一七六二）二月二日にまず下郷、翌二三日に上郷、最後に町方と段階的に展開した。ただし、最初に強訴の計画が持ち上がったのは上郷で、二月一〇日頃から強訴の相談が行われ、二一日に結集して城下に押し寄せる計画が立てられたが、一部の庄屋の注進で藩に発覚した。一方下郷では二二日に桐林村・上川路村・時又村の三か村百姓が結集し、城下へと押しかけていった。百姓勢は途中で下郷各村百姓を加えながら打ちこわしを行い、翌二三日には上郷の百姓勢も蜂起した。

百姓勢は、藩に十数か条におよぶ要求を提出するとともに、町在あわせて一三軒の打ちこわしを行った（表参照）<sup>(13)</sup>。打ちこわし対象は主に千人講の世話人（「行司役」・「会行司」と呼ばれる）および発案者である郡奉行黒須と関係を取り結んでいた家々や一揆に参加の庄屋宅であった。一部の庄屋は不参加であったが、基本的には惣百姓に加えて町方も参加した「全藩一揆」で、結果として藩は千人講の廃止ほか一部の要求を認め、かつ黒須を罷免した。

千人講騒動後の藩の動向としては、千人講騒動から約一ヶ月後の三月二七日に、領内村役人・町役人を呼び集

表 千人講騒動の打ちこわし被害者

下郷	下山村庄屋六左衛門
	上山村庄屋孫右衛門
上郷	下黒田村庄屋仙左衛門
	上黒田村庄屋新助
	座光寺村庄屋七左衛門
	下市田村庄屋与右衛門
	下市田村庄屋平九郎
町方	大横町山田屋新七
	大横町三保屋与市
	池田町米屋太兵衛
	知久町南部屋清蔵
	桜町油屋三郎右衛門
	伝馬町竹丸屋半兵衛

※「宝暦十二年百姓共強訴一件抄」（飯田市熊谷操氏所蔵文書・飯田市歴史研究所近世写真帳 42-1）等から作成。

め、千人講騒動の際に百姓・町人たちから提出された要求の回答を申し渡し、その場で請書を取り立てている。その後、藩の取り調べは五月一六日から開始され、七月六日から首謀者の捕縛がはじまった。ただし、被捕縛者は入牢後、明和二年（一七六五）一月までに全員放免となり、死罪などの重い処罰は行われなかった。

二 不参加者の願書

まずは不参加者の一揆直後の動向から確認したい。次の史料1は、上郷の三日市場村庄屋民右衛門が宝暦一二年（一七六二）四月付けで藩に提出した願書の写しである。

【史料1】<sup>(4)</sup>

乍恐口上書を以奉「」候御事

一、去暮千人講被仰付候儀、御「」御公役被為蒙仰候節、一時二差上候而ハ百姓共難儀可致候と御慈悲を以連々ニ差上候様ニ被仰付候儀と奉存、村方長百姓一同申談シ候所、被仰付候通ニ「」続奉存候ト申候ニ付、五分通り御願申上末々百姓共へ茂得心為仕、漸双方三ヶ月指上候所、村々騒動仕御願申上候義ニ御座候ハ、御役所へ再三御願

申上御聞届も無御座候ハ、押掛ケ嗽訴可仕義も御座候得共、一向庄屋を先立御願茂不申上理不尽致方、殊ニ御公儀様御法度相背徒党仕嗽訴仕候儀不届千万御上不恐致方奉存候、然所三月廿七日御会所へ被召出御書下奉承知印形仕差上申候、其席「」可申上候得共、外々へ差障リニ相成候間指控罷在候、去十月下旬ニ不調法ノ私義御役義被仰付御慈悲を以相勤罷在候、尚御領主様御国替以来甚御憐愍之儀ハ諸運上諸色御減少ニ被成下、其上御公儀様より被仰付候木曾伝馬助郷ノ儀茂相勤候節「」救米被下置、甚御憐愍被成下難有奉存候、然処利不尽之者と一同ノ印形仕差上置候義、迷惑至極ニ奉存候、徒党人数ニ而曾而無御座も万一右之人数と申者御座候ハ、何方迄茂罷出申分可仕候間、理不尽者と一紙印形末世相分り候様ニ御慈悲を以、私印形御削被下置候様ニ奉願上候、以上

宝曆十二年午ノ年四月日

三日市場村庄屋 民右衛門

#### 御代官様

ここでは、三月二十七日に提出した請書に関わつて、その印形の取り消しを願っている。民右衛門は「徒党」に参加しておらず、にもかかわらず「利不尽之者」と「一同」に印形を差し上げたことを「迷惑至極」として、「末世相分り候様ニ」と削除を願ひ出ている。この「利不尽之者」という表現は、「御役所」に再三願ひ出たうえで聞き届けが無ければ押しかけて「嗽訴可仕義」もあるが、それも無く強訴したことを「理不尽致方」と述べていることに基づくものだろう。再三願ひ出たうえであれば利不尽ではないとする強訴観も興味深いが、注目したいのは削除願ひの理由が「末世相分り候様ニ」とされていることである。民右衛門によれば、彼自身が千人講騒動に参加しなかったことは「万一右之人数と申者御座候ハ、何方迄茂罷出申分可仕候」と自ら申し出て証明することができる

が、「理不尽者と一紙印形」の請書は、「末世」に誤解を与える可能性があるという。子孫への誤解を恐れる背景には、強訴・徒党への参加を「家」として不名誉なものと捉える意識が指摘できるだろう。かかる意識は、右の願書において宝暦十一年一〇月に「御役義」を仰せ付けられ、国替以来の「領主」の「憐愍」が述べられていることからして、庄屋としての立場に基づくものであったと推察される。

もちろんこれは藩への願書であることから、その内容を額面通りに受け取ることに注意が必要である。というのも、こうした内容の願書は民右衛門のみならず、不参加であった領内他村の庄屋からも提出していたことが確認できるからである。次の史料2を見てほしい。

【史料2】<sup>(15)</sup>

申渡之事

山村 六左衛門

当二月廿三日、上郷下郷村々致徒党、家並不残追手御門前へ罷出及強訴、其上其方居宅打潰候義、公儀御制禁之相破、徒党ヲ結び候義甚不届至極ニ候、非分之願方ニ候得共、百姓共難義之段被聞召届、御慈悲ヲ以願之内御免之分三月廿七日御領分惣村へ申渡、為村惣代村々庄屋組頭長百平百姓御請印形差上候処、其方義ハ既ニ願方百姓とも中間ニ無之、却而意趣ヲ含、居宅ヲ被潰候義、惣百姓共強訴仲間ニハ無之段潔白ニ候、先達而三月廿七日申渡候御請惣代印形差上候得共、末代迄悪名ヲ残シ候儀難義ニ付、其方義ハ右御請印形消遣候、依之右被仰渡書奥ニ徒党人数相除キ候段、書付以申渡者也、

右 被仰渡候趣奉承知候、先達而御領分一統徒党仕及強訴候儀、私義右仲間ニ無御座候趣ハ、惣村却而私へ意趣ヲ含、居宅打潰候上ハ潔白ニ相別候段被仰聞、御請印形御除キ被下候様、願書御代官所迄差上候之処、御聞届被成

下難有仕合ニ奉存候、為其印形仕差上申候、以上

宝曆十二年五月十六日

山村六左衛門判

### 御奉行所

史料2は、下郷の山村庄屋六左衛門が宝曆一二年五月一六日付で藩に提出した請書の写しである。前段は三月二七日の請書の印形を取り消す旨の藩の申し渡りで、後段に今回の請書の趣旨が述べられているが、これによれば六左衛門も「御請印形御除キ被下候」との願書を提出していたことがわかる。注目したいのは、藩が印形の取り消し願いを認めた理由に「末代迄悪名ヲ残シ候儀難義ニ付」とあることである。史料1の三日市場村庄屋民右衛門の願書をふまえれば、六左衛門も「末世相分り候様ニ」との理由で願書を提出したものと思われる。実は、これは上郷の上黒田村庄屋新助など五人が提出した次の史料3からも確認できる。

### 【史料3】<sup>(16)</sup>

#### 申渡之事

上黒田庄屋 新助

下黒田村庄屋 仙左衛門

座光寺村庄屋 七左衛門

下市田村庄屋 平九郎

同村同断 与右衛門

当二月廿三日上郷下郷村々致徒党、家並不残追手御門前江罷出及強訴、其上其方共居宅打潰候儀、公儀御制禁を

相破徒党を結ひ候儀甚不届至極ニ候、非分之願方ニ候得共百姓共難儀之段被 聞召届御慈悲を以願之内 御免之分  
三月廿七日御領分惣村江申渡、為村惣代村々庄屋組頭長百姓平百姓御請印形差上候処、其方共五人之義ハ既ニ願方  
百姓共中間ニ無之、却而意趣を舍居宅を被打潰候義、惣百姓とも強訴仲間ニハ無之段潔白ニ候、先達而三月廿七日  
申渡之御請惣代印形差上候得共、末代迄悪名を殘候義難儀ニ付、其方共五人之義ハ右御請印形御除被下候様との願  
之趣承届、則印形潰遣候、依之右被 仰渡書與ニ徒党人数相除候段書付を以申渡候也

宝曆十二壬午年五月十六日

右 被仰渡候趣奉承知候、先達而御領分ニ統徒党仕及強訴候義、私共右仲間ニ無御座趣者、惣村却而私共へ意  
趣を舍居宅打潰候上ハ潔白ニ相別候段被 仰聞、御請印形御除被下候様願書御代官所迄差上候之処、御聞届被成下  
御請印形御除被下候段被 仰付難有仕合ニ奉存候、為其印形仕差上申候、以上

宝曆十二壬午年五月十六日

下市田村庄屋 与右衛門印

同村同断 平九郎印

座光寺村庄屋 七左衛門印

下黒田村庄屋 仙左衛門印

上黒田庄屋 新助印

史料3は、文言の表現も含めて内容は史料2とほぼ同じである。つまり、史料2・3の請書とも一定の様式のもの  
とに提出されていたことがわかる。ここからいえば、史料1の三月二七日の請書の印形取り消し願いも同様であつ  
たと推測されるだろう。したがって、史料3にも「末代迄悪名を殘候義難儀ニ付、其方共五人之義ハ右御請印形御

除被下候様との願之趣」とあるが、この「末代迄悪名を残候義難儀ニ付」という理由は、願書の文面上の建て前であったと解釈できるかもしれない。

しかし、史料2の山村六左衛門と、史料3の上黒田村庄屋新助など五人については、史料3に「私共右仲間ニ無御座趣者、惣村却而私共へ意趣を含居宅打潰候上ハ潔白ニ相別候段」とあるように、打ちこわしの被害者であることに留意する必要がある。庄屋である立場からすれば、確かに今回の一揆は「公儀御制禁を打破」るものであり、ましてや打ちこわしの被害にあった立場からすれば、「強訴仲間」と見なされることは許しがたいことであつたことは想像に難くない。ここでは、それが建て前か本音かに関わらず、藩と不参加者との間で、百姓一揆への荷担が「末代迄悪名を残候義」として処理されていたことを確認しておきたい。

### 三 打ちこわし被害者の願書

では次に、打ちこわし被害者の一揆直後の動向を見ていこう。<sup>(17)</sup>

#### 【史料4】<sup>(18)</sup>

乍恐以口上書奉願上候御事

一、私共義不調法成者共ニ御座候処、重キ庄屋御役儀被為 仰付無抛御請奉申上、然上ハ乍恐 御上之御為并村方之ため心掛ケ、勘定等私曲も得無御座候様ニ差心得大切ニ相勤罷有候処、私共意根<sup>(道根)</sup>之請打潰され候覚曾テ無御座候、何れ之訳ニ御座候哉、先達而奉申上候通上郷御領分大勢参理不尽ニ押込、家財・穀物等迄悉切散シ、開作之心当并作道具一向無御座候、差当り甚難儀至極仕候、尤御手代様御見分被成下候通悉打潰シ、当時渡世之手立一位置

所無御座罷有候、御上（不脱カ）仰渡シ茂無御座処御願上候段恐入奉存候得共、願恐奉願上候御事

一、此度之騒動ニ付、上郷庄屋大勢之内私共何れ之筋ニ而家財打潰シ候哉、愚案ニ落着不仕候、万一 御公役御用意御会金行司役被為 仰付候故かと奉存候得共、是又未一日茂相勤不申候、尤諸御役人様方御存知之通私曲之筋曾テ無御座候、御上御太切（大）而已乍恐差心得罷有候、此上御役儀相勤罷有候而者、村方支配茂難成、第一御用等差支之筋出来仕候而者申訳茂無御座候、此段 御賢察被成下、庄屋御役儀御免被成下置候様奉願上候御事、右之趣乍恐被為 聞召訳、悲道（悲）ニ相潰シ候哉、私共誤之筋ニ御座候哉、賞罰被為 仰付被下置候ハ、難有奉存候、哀御慈悲ヲ以御下ニ住居仕候共、又者他国稼ニ罷出渡世仕候共、其上之了簡相極申度奉存候、左候へハ他所親類迄茂外聞相立可申哉と奉願上候、以上

宝曆十二年三月日

下市田村 平九郎

#### 御代官所

与右衛門

史料4は、下市田村庄屋平九郎、同村庄屋与右衛門の両名が宝曆一二年（一七六二）三月に藩の代官所宛てに作成した願書の写しである。ここでは、まず平九郎らが「庄屋役義御免」を願い出ていることに注目したい。しかもそれは、打ちこわしによる経済的損失が理由ではなく、謂われ無き打ちこわしによって、今後の「村方支配」に差し支えることへの懸念が理由とされている。ただし、注意したいのは「庄屋役義御免」がこの願書の趣旨ではなく、それは「悲道（悲）ニ相潰シ候哉、私共誤之筋ニ御座候哉、賞罰被為 仰付被下置候ハ、難有奉存候」の一文にあることである。すなわち、打ちこわした側と打ちこわし被害者である自分たちとに、「賞罰」を求めている点にある。その意味で、「庄屋役義御免」の願い出は「他国稼ニ罷出渡世仕候共」という言葉と合わせて、いわば藩に「賞罰」

を迫るための「脅迫」に近い文言であったと解釈されるのである。そして、その背景には、末尾に「他所親類」までも「外聞」が立つとあるように、世間への面目が意識されていたことは注目される。打ちこわしの被害を「外聞」に悪いとする点は、史料1〜3で確認した百姓一揆への荷担を「末代迄悪名」とする意識と相通ずるものである。ただし、「他所親類」への「外聞」を気にしている点には少し注意する必要がある。この点をふまえつつ、次の史料5を見てみたい。

### 【史料5】<sup>(19)</sup>

乍恐以口上書奉願上候御事

一、私儀不調法未熟成ものニ御座候所、御役人様方御眼かねヲ以御大切成御役義被為 仰付被下置難有御請仕、乍恐御 上之御為第一并ニ村方のため相心掛随分大切ニ相勤申候所、今度存之外成大難ニ相惑迷仕候御事

一、私居家家財潰され候程之悪難請可申覚曾而無御座候、勿論御 上牀ハ不及奉申上、村方へ対私欲之筋毛頭不仕候所、何れ之訳御座候哉、先達而御届ケ申上候通、上郷中一同ニ騒動仕理不尽押込、家財ハ不及申上、土藏迄打破、夫食之穀物等悉切被散、非道之致かた心外至極奉存候、尤御手代様方委細御見分被成被下候通ニ御座候、此節御 上より御下知も無御座候所、御願差上候段恐入奉存候得共、此上村方百姓共所存之程難斗、他領之一家共諸外聞申分も無御座、旁々相考迷惑仕候得共、此節御 上之被 仰渡可奉相待之所、開作ニ指向故、乍恐奉願上候御事

一、此度騒動ニ付、上郷中庄屋村々ニ御座候内何れ之訳ニ而私共打潰候哉、愚案ニ落着不仕候、此上御役義相勤罷有候而茂村方支配難成、第一御用等差支之筋出来仕候てハ申訳も無御座難儀至極奉存候、此段乍恐御賢察成被下置、庄屋御役義御免被遊被下置候様奉願上候御事

一、右申上候通、家財夫食等并ニ農道具不残打潰され、差当り耕作可仕方便一向無御座、難儀至極仕候間、御慈悲ヲ以御了簡成被下置、開作仕候様ニ奉願上候御事

右之趣乍恐被為 聞召分、庄屋御役御免成被下置候ハ、難有奉存候、然上ハ世間躰密ニ仕身上取続、永御百姓相勤申度奉願上候、以上

宝暦十二年午三月

上黒田村 新助

#### 御代官所

史料5は、上黒田村庄屋新助が宝暦二年三月に作成した願書の写しである。ここから史料4と同様に、新助も村方に対して「私欲之筋」が無いにも関わらず打ちこわされ、「村方支配」が成り難いため「庄屋御役御免」を願っていたことがわかる。史料4と内容が近似し、かつ作成年月も同一であることから、彼ら上郷の打ちこわし被害者たちが願書の提出にあたって、その趣旨等の歩調を合わせていたことが推察される。

ただし、史料4と異なる点としては、①千人講の「行司役」に関する言及が無いこと、②打ちこわしに関する「賞罰」は求めておらず、「他国稼」に関する言及も無いことが指摘できる。つまり、願書の内容は確かに近似するが、全くの同一ではないということである。このことは、打ちこわし被害者たちの間で願書の提出については歩調を合わせつつも、細部の内容や作成自体は個別に行っていたことを物語るものと思われる。

さて、史料5でも新助が「他領之一家共」への「諸外聞」を気にしていることが確認できる。この点は打ちこわし被害者たちに共通する意識であったことが推察されるが、ではいったい彼らは何を気にしていたのか。ここで注目したいのは、打ちこわしの「利不尽」さや「非道之致かた」の根拠として、村方に対する「私欲之筋」が無かつ

たことが挙げられている点である。この点は史料4でも「私曲之筋」は無かったことが主張されている。

これらの言説からは、打ちこわしが「私欲之筋」や「私曲之筋」に対して行われるものと認識されていたことが読み取れる。これを新助の主張に置き換えれば、「私欲之筋」があつたのならば打ちこわしは「利不尽」ではない、となるだろう。つまり、打ちこわしとは「私欲」に対する社会的制裁であることを打ちこわし被害者たち自身が認識していたことが指摘できるのである。新助や平九郎らが「外聞」を気にしていた理由は、この点に求められるのではないか。地域社会において打ちこわしが「私欲」に対する社会的制裁として捉えられていたからこそ、打ちこわし被害者たちにとっては「外聞」が気になっていたと考えられるのである。彼らにとって打ちこわしとは、まさに「家」の不名誉であつたのである。この点は次の史料からもうかがえる。

#### 【史料6】<sup>20)</sup>

乍恐書付を以奉願上候

一、先達而御上ニ茂御存知被為遊候通、二月廿三日御領分百姓大勢徒党仕、斧懸矢を以私居宅土蔵悉ク伐崩家財雜物等不残打潰し、不断心命をつなき候味噌江も下糞を打込、剩御被経文等迄切散し、佛神を不奉恐前代未聞之狼藉、言語道断之致方難儀至極仕候二付、先達而早速御届仕候処早速御見分成被下置難有奉存候得共、猶又逐一御吟味奉願上度左ニ申上候御事

一、私儀近年御役儀被仰付大切ニ相慎御上之儀ハ不及申上ニ、村方惣百姓江対し不法之儀仕候覺曾而無御座候処、右躰之致方何共難心得奉存候、徒党之儀ハ御公儀様御條目ニも厳敷御制禁ニ御座候処右之狼藉仕候故御吟味奉願上候

一、私儀御役儀相勤候二付何様之不調法御座候而相潰候哉、前条ニ申上候通り村方江対し少成共私欲之筋仕候無御

座候、増而餘村江対し、何之差綺ひ候覚無御座候処、村々一同二徒党仕打潰し候儀旁以難心得奉存候、若被仰渡候千人講二付打潰候哉、左候ハ、下郷も同様之儀ニ御座候得ハ打潰可申筈之処、左様之儀も無御座、然者右之筋共不奉存候、千人講御役之儀ニ付私儀□以私欲之筋不仕候段、乍恐 御上ニ茂御存知被遊候御儀と奉存候、御役之儀ハ御上ハ御目かねを以被仰付相勤候処、徒党仕右躰之狼藉相企候儀御上江対し不届至極と奉存候、乍恐御領内御百姓不残被召出、潔白之御吟味成可被下置候而ハ御役義茂難有、且私義ニ御座候而も相応ニ他郷ニも親類共多御座候、其上子孫永々申伝江も御座候との「一」之身分相立不申、人前も交り「一」半召出仕候間、無是非御上之御威光を以何方迄も御願可申上覚悟ニ□□候、乍恐右之段被為聞召分御慈悲を以身分相立候様御吟味嚴重ニも奉願上候、尤潰され候品々者先達而御見分成被下置候間、重而御吟味之節目録ニ仕差上可申候御事  
乍恐右之趣被為 聞召御慈悲を以御吟味之上家、土蔵、家財不残右之通御領内江被仰付拵立急度相返し候、永御役相勤百姓相続仕候様成被下置候ハ、重々難有仕合ニ奉存候、以上

宝曆十二年午三月日

座光寺村願人 庄や

七左衛門

### 御代官所

史料6は、座光寺村庄屋七左衛門が宝暦一二年三月に作成した願書の写しである。七左衛門の場合は、庄屋役の御免は求めておらず、藩の嚴重な吟味を求めている点、また打ちこわされた家などの物質的被害の補償も求めている点、史料4・5と異なる主張といえる。その主眼は藩の吟味の実施に置かれているが、それは「親類」や「子孫」に対して「身分」が立つようにと述べているように、藩の吟味（「御威光」）によって、七左衛門が「私欲之

筋」など不正を行っていないかったこと＝打ちこわしが不当な「狼藉」であったことの明確化を求めるものであったといえるだろう。七左衛門もまた打ちこわされたことによる「外聞」を気にしていたと思われる。

ここまで、上郷において打ちこわしを受けた下市田村庄屋平九郎、同村庄屋与右衛門（史料4）、上黒田村庄屋新助（史料5）、座光寺村庄屋七左衛門（史料6）の願書を見てきたが、次の史料7は右の個別の願書をふまえたうえで、これに下黒田村庄屋仙右衛門を加えた上郷の打ちこわし被害者五人によって作成された願書下書きと推測される。

### 【史料7】<sup>(2)</sup>

#### 奉願上候口上之覚

一、五人之庄屋共此上御憐愍奉願上候、惣村段々御詮義被遊候処、五人之者「一」、意趣<sup>(遺恨)</sup>意恨<sup>(遺恨)</sup>差挟候而打潰し候訳少も無御座候、騒立何之弁も無御座、理不尽ニ打潰し候ニ相違無御座「一」意根<sup>(遺恨)</sup>之義無御座候とハ申候得共、去ル巳ノ暮御会金被仰付候節、惣村へ対し、下へも憐愍差加へ候様ニ申談候得共、誠ハ内心ニ御上へ被仰出候義相立候様ニ仕度と取斗申候、外村之者共も潰シニこしていたす心ハ無御座候得共、村内之者へ理害<sup>(マヤ)</sup>疾と不申聞届不申候間、村内之者申事ニこまり自然と御上之事罷末ニ罷成申候、是ハ手前働無之義ニ御座候、五人之もの共ハ惣村へ対し理害得と申聞候得ハ、惣村之者共理屈ニおされ返答無之程之事申掛候、村内支配之者へハ猶々嚴敷理害申聞御会金五分通ニ御請相済申候、何分ニも御上へ被仰出候義、是悲々相立候様ニ仕度内心ニ差挟罷在候、惣村へ対し兎角御講取立差上候様ニ申掛ケ候得ハ外村氣入不申事斗り申掛ケ候得者、表向意根<sup>(遺恨)</sup>ハ無之とハ申候得共、右之意根<sup>(遺恨)</sup>も可有御座事ニ奉存候、其節両筋目々ニ談有之候得共、両筋ともニ平御訴詔之談、潰しニいたす談之趣五人之もの共ハ上下宜所を嚴敷理害申聞候故、理屈ニこまり返答相成不申、先三分通と願出申候相談ニ相応金御上ニも御都合宜、

下二而も取統能義ニ御座候、御講相立不申候得共、其節五人之者共、乍恐忠義之程御勘弁被遊可被下候、御講被仰付候以前先納金被仰付候節も役<sup>（ツマ）</sup>氣と申候得共、其節も五人之もの共ハ惣而村内取捌 御上□下□惣万事御上御大切二仕候者共二而心掛之程、外之者共とハ格別宜取捌相見へ申候、騒動後も猶々 御上御大切二奉存万事出精仕候、此段ハ難尽筆紙候、乍恐此上何分二も末代身分相立取統御役義相勤候様ニ御憐愍奉願上候、御上御大切奉存家財打破レ候義ニ御座候ハ、本意相叶難有奉存候、難儀ニ少も不奉存候趣ニ相聞候得者、猶々右義之程乍憚御勘弁至極可被下候、此上御憐愍被 仰出候而、末世名残ニ罷成候間、乍憚宜御取成相立候様ニ被成下候ハ、扱私難有仕合奉存候、委細之義先頃御尋被遊候節申上、御存知被遊候通ニ御座候間、宜御取成被仰出被下置候ハ、難有仕合奉存候、以上

八月

史料7は年欠であるが、内容から史料4・5・6と次の史料8の間に作成されたものと推測される。ここで彼ら五人は、第一に、「惣村」の「御詮議」の中で、打ちこわしには「意趣<sup>（遺恨）</sup>意恨」は無いと述べているようだが、「去ル巳ノ暮御会金被仰付候節」に「惣村」に対し「理害」を申し聞かせて「御講」の取り立てを行ったことが、「意恨<sup>（遺恨）</sup>」となっていると思われること、第二に、しかし取り立ては「何分二も御上〆被仰出候義、是非々相立候様」にした「内心」があり、自分たちは騒動以前も以後も「御上御大切二而奉存万事出精」してきたこと、そのため「末代身分相立、取統御役義相勤候様御憐愍」を願っている。

この願書ではあくまで千人講の世話人として「御上」のために働いたこと（「忠義」）が強調されており、それをもって「末代身分相立」ことを求めている点が注目される。かかる要求の背景には、これまで史料4・5・6で見してきたように、「外聞」を気にする「家」意識が指摘できるだろう。打ちこわしを「家」の不名誉とする意識が

「末代身分相立」ことを求めたと考えられるのである。これが実際に提出されたのかは分からないが、藩では明和元年（一七六四）一二月に次のような申し渡しを行っている。

【史料8】<sup>22)</sup>

申渡之事

上黒田村庄屋 新助

下黒田村庄屋 仙左衛門

座光寺村庄屋 七左衛門

下市田村庄屋 与右衛門

同村同断 平九郎

去ル已暮会金申付候節、上郷惣村御請致難洪候趣ニ候処、其方共存寄者、御公役御手当之為被仰付候事、其節一度ニ多分之御用金差上候而者下ニ而難儀仕候ニ付、御下之者共取続能様ニとの以思召被仰付、上御用も弁、上下宜筋被仰付候御事、筋合得と相弁候故、惣村之者共江利害申聞御請仕候様申談候処、惣村之者共者御請難仕候間御断可申上旨相談有之候ニ付、其方共申談候者、被仰付儀不相立候而者不濟義ニ候得者、被仰付も相立、下ニ而茂取続能筋段々申談候而、漸惣村御請相済、去ル已十二月ヨリ会金差出候、惣村御請相済候以後、其方共義者会金行事役年番ニ而老人宛相勤候様申付候、右之通惣村納得之上致御請会金差出候処、去ル午二月ニ至村々出訴之内談有之趣承之、早速訴出、村内之者共を取鎮候、然処二月廿三日惣村一同及強訴、其節其方共居宅打潰シ候ニ付令吟味処、何者相越打潰し候哉一向不相知、意趣意根請可申覚曾而無之候得共、会金ニ付惣村江利害申聞候ニ付御請仕候故、ケ様筋合ニ而茂意根差挟候哉、其外心当り之義無之旨申之候、其方共最初会金申付候砌より、上御為、次ニ百姓共為

宜様ニ致度、段々致出情取捌候趣尤之事ニ候、依之其方共一生之間式人扶持被下候、不慮之難ニ逢候ニ付、為取統米三拾俵つ、拝借被仰付候間、取統御役儀相勤可申者也

明和元年閏十二月廿五日

これによれば、藩から五人に対して「一生之間式人扶持」の付与と三十俵の拝借米が申し渡されたことがわかる。藩の対応として金銭などの褒美を一時的に付与するのではなく、「扶持」を与えている点は注目される。世話人を務めて、千人講の徴収を主体的に取り組んだ打ちこわし被害者たちは、藩にとっては確かに「御上のため」に尽力した庄屋であり、さらにいえば百姓一揆に荷担せず、かえって打ちこわしの被害に遭ったことも褒賞と補償を与えた理由のひとつであったと思われる。

ただし、これまで見てきた史料4～7の願書を読みかえれば、これが打ちこわし被害者たちの要求に藩が応えたものであることが理解されるだろう。打ちこわし被害者たちは打ちこわし被害の物質的補償を求めるというよりも、打ちこわしの利不尽さを訴えるとともに、打ちこわしの前提となった千人講会金の徴収に係る役務の貢献度を強調することで、藩に褒賞を求めている。この点は、庄屋役の御免や他国稼ぎを引き合いに、藩に「賞罰」を求めている<sup>23</sup>、下市田村平九郎と与右衛門の願書（史料4）に顕著である。打ちこわし被害者たちは何よりも地域社会における「外聞」を重視しており、打ちこわされたことを不名誉とする「家」意識を有していた。その意味で「扶持」の付与といった藩の対応は、「家」の名誉を守ることを強く求めた打ちこわし被害者たちの要求に応えたものと理解できる。藩にとっても、彼らを庇護することは〈その後〉の領内村々の秩序を安定化させる意味でも必要不可欠であったと思われるが、ここではその背景に、打ちこわし被害者たちによる「家」の名誉回復を求めた訴願行動があったこと、それが藩をして「扶持」の付与を引き出したことを強調しておきたい。

#### 四 打ちこわし被害者の〈その後〉

「一生之間式人扶持」を付与された五人は、〈その後〉も引き続き庄屋を務めていたようだが、明和元年（一七六四）の申し渡しから八年後の安永元年（一七七二）に事態は急変した。その点の事情を次の史料から確認したい。

#### 【史料9】<sup>(24)</sup>

（前欠カ）

七左衛門

平九郎

与右衛門

申上候口上

此度御時節柄殊ニ御類焼ニ付御多分御入用御 上甚御氣之毒被為 思召候得共、無御扨御家中様方御増歩一御引被為遊候段被 仰聞、私共江被下置候式人御扶持米不殘三ヶ年之間被為遊 御借り度段被為 仰付、此節之御儀如何様之儀ニ而も早速奉畏候而本意奉存候得共、右御扶持之儀者私共一生之間被下置候御儀、世上江之間江私共身分御立被下候ためニ被下置と為心得、世間いこんもはれ外聞も相立、偏御慈悲与難有奉存罷在、此式人御扶持米之義者私共身ニ取り候而ハ身ニ替大切奉存罷在候処、右之段被 仰付無御扨御儀ニ彼は申上候者<sup>□本意候様</sup>万氣之毒奉存候へ共、私共明日ニも相果候得ハ無何と御扶持御取上同様ニ相成、世間之人々<sup>候、此段為仰付候處、御取上申シ道ニ而も無御儀候得共、世間ニ而も御扶持も御被取上候ニ而ト之</sup>江斷ハ不被聞申、他之人口<sup>風聞号候ても人々ニ甲分も不相成、其難儀仕振ニ奉存</sup>甚氣之毒奉存候、此上之御慈悲ニ御賢慮成被下御扶持米者<sup>○不相預申</sup>被下置、外ニ式三俵宛も年永クも差上候、

然又ハ乍憚歩一御取被下候、然いづれ共宜様御取成被下何卒右被下置、△御申渡之書面之通被下置候様  
奉願上候、△御役人様方御慈悲ニ願之通被<sup>生恐石之趣御支配△さま</sup>仰付被下置候ハ、幾重ニも難有奉存候、此外ニも申上度御儀御座  
候へ共急筆ニ難計口上ニ而口上ニ而御聞被下置候様奉願上候、以上

辰十月十二日

史料9は、上黒田村庄屋新助家に残された史料で、前欠ながら先の五人の連名で藩に宛てて作成された口上書の下書きである。作成年は後述の史料をふまえれば安永元年であることが推定できる。下書きのため添削が行われており文意が読み取りづらいが、ここから安永元年に藩の上屋敷が類焼したことによって、安永元年から三年間にわたって「式人御扶持米」の借り上げが申し渡されたことが判明する。ここで注目されるのは、藩の借り上げに対して、「世間」の風評を理由に「御扶持米」の継続を願っていることである。「御扶持米」は、「世間」では「私共身分御立被下候ためニ被下置」と心得ており、これにより「世間」の「いこん」も晴れて「外聞」も立ち、私たちは「御扶持米」を「身二替」り大切にしてきたという。今回の借り上げについては「御取上」ではないが、「世間」では「御取上」と捉えられ、要らぬ風聞が立つのではないかと恐れているのである。打ちこわし被害者たちにとって、この点が特に気がかりであった様子はその添削の跡からも推察することができよう。

これらの言説が文書上のレトリックではなく、打ちこわし被害者たちの「御扶持米」に対する認識を示しているのは、「御扶持米」の継続の代わりに年二、三俵ずつ、あるいは「歩一」の上納を申し出ている点にあらわれている。つまり、打ちこわし被害者たちにとって「御扶持米」とは、単に経済的な利益ではなく、「世間」における身分的な保障を意味していたことが推察されるのである。この点は、一揆直後の願書から一貫しているといえるだろう。彼らは「世間」に対する「家」の名誉を何よりも重視していたのである。

さて、右の口上書が実際に提出されたのかどうかは不明だが、打ちこわし被害者たちの願いは叶わず、安永元年に扶持の借り上げを実施されたことが次の史料から判明する。

【史料10】<sup>(26)</sup>

乍恐以口上書奉願上候御事

一、私親新助義、先達而騒動之節居宅家財打被潰難儀仕候ニ付、段々御願申上候処御吟味之上生涯式人扶持被下置難有頂戴仕罷有候処、去ル辰暮右御扶持米三ヶ年御借被為遊候段被仰付奉畏候、其節新助申候者、手前老衰病身故御役儀蒙御免隠居仕御用ニ茂不相立御扶持戴様ニ候儀茂恐入、又者相果候へハ夫限跡ニ残候印無之、何とぞ御扶持差上何成共子孫江永相残り候印御願申上度近年心掛候へ共、長病之義折茂無御座候処、此度御扶持御借上被為成候へハ此節御願申上候儀ハ難相成、彼是延引故存念不相叶扱者残に存候、此旨連中江咄相談いたし度様申聞候間、下黒田村仙左衛門、座光寺村七左衛門、下市田村与右衛門、平九郎、頼寄内談仕候得共、御扶持頂戴仕候右五人同様之義ニ御座候へハ相談落着不仕、最早翌午三月新助相果申候、夫々跡家之きすハ残り、乍恐 御上々御憐愍之御印者堪、私身ニ取甚難儀至極奉存候ニ付、右四人衆相頼奉願上候、哀御慈悲ヲ以何成とも御印被下置候ハ、親存念ニ相叶難有仕合奉存候、以上

安永五年申十月

上黒田村 甚右衛門

右甚右衛門奉願上候趣、尤千万一同承知仕御願奉申上候、願趣被為聞召分御慈悲ヲ以被 仰付被下置候様私共一同奉願上候、以上

下市田村庄屋 平九郎

同村同断 与右衛門

座光寺村同断 七左衛門  
下黒田村同断 仙左衛門

### 御代官所

史料10は、上黒田村庄屋新助の子甚右衛門と下市田村庄屋平九郎など四人によって作成された藩の代官所宛ての願書下書きである。<sup>(27)</sup>ここから安永元年の扶持借り上げが予定通り実施されたことがわかる。そのうえで注目したいのは、この願書で甚右衛門らが藩に求めているのが、「御扶持」ではなく「何成とも御印」であることである。史料9では「御扶持」の借り上げは三年間とされており、この時点（安永五年一〇月）で借り上げが継続されているのか、元に戻ったのかはわからない。しかし、この願書が主眼としているのは「御扶持」の借り上げの問題ではなく、家の代替わりに伴い、藩からの「何成とも御印」が無くなってしまうという問題であった。甚右衛門によれば、安永三年三月に亡くなった父新助は安永元年の扶持借り上げ以前から、「生涯弑人扶持」に代わる「跡二残候印」を求めており、「御扶持」を差し上げて、「何成共子孫江永相残り候印」を願おうと考えていたとされる。一代限りではなく、子孫に「御印」を残そうとする背景には、打ちこわされたことを「家之きす（傷）」であるとする「家」意識が指摘できるだろう。

さて、甚右衛門らはこの時いくつかの願書を準備していたようで、史料10と同じく安永五年一〇月の日付を持つ次のような願書も残されている。

### 【史料11】<sup>(28)</sup>

乍恐以書付奉願上候御事

一、去ル宝曆十一巳年御公役為御用意金御領分中へ御会金被為仰付、上郷二而市田村与右衛門、平九郎、座光寺村

七左衛門、下黒田村仙左衛門、上黒田村二而私親新介、右五人之者共江行司役被為仰付奉畏右会席御用相勤罷在候所、翌午二月御領分之者共強訴仕、追手御門前江相詰候節も右行司役五人之者共恐多奉存、村内取静メ候得共多人數之義力ニ不及直様御訴申上、私家内慎罷出不申候二付、右強訴仕候者共、右五人之者共居宅江押掛、家居家財打潰シ難儀困窮仕候二付、右之趣相歎御訴訟奉申上候所、御吟味之上御慈悲を以五人之者共江生涯之間式人扶持宛被為下置御書付頂戴難有仕合ニ奉存候、然所去ル辰年御上屋鋪御類焼二付、御入用金多御不手廻二付無御扱私親新助初右五人之者共江被為下置候御扶持米三ヶ年之間御借用被為遊候段被仰渡、御時節柄と申上恐承知奉畏候御事一、私親新助、永々相煩病氣之内私を以御代官様江奉願上候ハ、去ル巳年強訴之節願人差止家内慎罷在、右強訴ニ相加リ不申候間、一同敵々ニ罷成意魂心底ニ差挟罷在候得共、其刻御慈悲之御威光頂戴仕候二付、存心有之候者茂可致様無御座候得共、新助死去子孫ニ至候而、いか様之儀差挟ミ罷在候而、無差別疎シ□□候も難斗歎ケ敷奉存、何卒御憐愍を以子孫ニ至候而茂、御見捨不被為下置候様ニ奉願上候内、重病ニ而相果、存心相殘申候、勿論私義當時御役義相勤罷在候得者、御威光ニ而疎ミ申候様之者茂無御座候得共、私義輕キ百姓之義永久御役義相勤可申様も無御座、御役御免之後子孫ニ至候而も、右意魂被差合候惡名者相殘、先祖之切ハ申出候者も無御座候得ハ、いか様之義出来可仕も難斗、相果候親新助ハ不及申上、私義安堵不仕歎ケ敷義ニ奉存候、勿論此末不法致候者も御座候ハ、其節御吟味可被下と乍恐奉存候得共、御上江御苦勞奉掛、其上不埒之族有之、いか様之御咎メ請候者も出来仕候得者、猶更意魂相重候而ハ千万歎ケ敷義ニ奉存候間、以御憐愍子孫江相殘候御威光被仰付被下置候様奉願上候、ケ様之御願奉申上候而ハ、親新助御扶持頂戴仕候御義ニ御座候得ハ、同様ニ茂奉願上候所存ニも可被為聞召候得共、曾而以左様之義ハ毛頭無御座、相果候親新助初私か願に相立、私方へ子孫永久御威光を以睦敷相交り御百姓相続仕候様奉願上候、此段被為聞召分、御慈悲奉願上候、以上

安永五申年十月

願人 上黒田村

甚右衛門

右前書之通、上黒田村甚右衛門奉願上候趣、相果候新介生涯之節私共江も相談仕一統御願可仕筈ニ奉存候内、重病ニ而相果候二付、今般甚右衛門奉願上候私共一同承知仕、甚右衛門願之通被為仰付被下置候ハ、難有仕合奉存候、以上

市田村

与右衛門

平九郎

座光寺村

七左衛門

下黒田村

仙左衛門

御代官所

史料11は、藩に「御威光」を求めるその趣旨は史料10と同じであるが、内容としては「願人」（一揆参加者）との間「遺恨」の存在と、それが「御扶持」の頂戴Ⅱ「御慈悲之御威光」によって抑制されていたことが強調されている。特に子孫に至って「不法致候者」が出来し、「御上」に迷惑を掛けるとともに、もし「御咎」を受ける事態が生じれば、さらに「遺恨」が重なることを憂慮していると述べて、藩に「子孫永久御威光」を迫る構成は、史料10と大きく異なる点である。ただし、「御威光」といっても、「御扶持」を願っている訳ではないとする点は、史

料10の「何成とも御印」と同じ趣旨であり、やはりこの点に甚右衛門らの眼目があったことが指摘できるだろう。

ところで、史料11では「願人」＝「一揆参加者との間の「遺恨」の存在が強調されているが、この「遺恨」の意味には少し留意が必要である。というのも、一揆直後の願書でも「遺恨」の文言自体は出てくるが、例えば史料4では身の潔白を論じる際の表現（「遺恨」を受ける覚えは無い）として、史料7では「御上」のために働いたことを強調する表現（「会行司」として精勤したことが「遺恨」とされた）として使用されており、千人講騒動の打ちこわしの背景や理由の説明として使われている。これに対して史料11の「遺恨」とは、「右強訴二相加り不申候間、一同敵々ニ罷成意魂心底ニ差扶罷在候得共」とあるように、千人講騒動で「一同敵々」となったことによる「遺恨」という意味であり、千人講騒動によって生み出されたものとされている。

史料11では、かかる「遺恨」が「御扶持」によって抑制されていたとして、引き続き「御威光」を求める理由とされており、願書のレトリックである可能性も否定はできない。しかし、前節でみた一揆直後の願書（史料4・7）では「外聞」が褒賞を求める理由とされていたことをふまえれば、少なくとも願書上における要求の方法に変化が認められるのではないか。この点をふまえつつ、次の願書下書きを見てみたい。

## 【史料12】<sup>(29)</sup>

乍恐口上書を以奉申上候

一、宝暦十一巳年御会金被仰付候ニ付、上郷ニてハ市田村与右衛門、平九郎、座光寺村七左衛門、上黒田村新助、下黒田村仙左衛門右五人之者共へ行司役被仰付 御上御存之儀と被仰渡候間、早速御請仕相勤被有候処、翌午ノ二月御領分中強訴仕候節、私共五人之者家居家財打潰シ致狼藉、何之意趣遺恨とも覚へ無御座候処、御吟味之上私共五人江一生之間式人扶持宛被下置候段被仰渡、御書下シ迄頂戴仕、依之右五人之者共私曲之筋者無之段、一旦世評

も相止ミ難有奉存候

一、此度御時節柄、殊ニ御類焼ニ付御多分御入用被為有御座、御上甚御氣之毒ニ被為思召、無御抛御家中様方御増歩御引被為遊候段被仰聞、私共へ被下置候式人扶持米之儀も不残三ヶ年之間被為遊御借り候旨被仰付、此節之御儀如何様之義ニ而も早速奉畏候而、本意ニ奉存候得者、一言之御訟訴<sup>(マコ)</sup>も不奉申上奉差上候得共、右御扶持米之儀者先達而御扱之通之訳合ニ而被下置、依之世間外中私共身分御立被下、右之遺恨も相晴シ、偏ニ御慈悲と奉存、此御扶持米之儀者私共身ニ取候而ハ、絶言語難有大切ニ頂戴仕被遣申候、然処右被仰渡有之、勿論年季御限り有之、御取上ケと申義ニてハ無御座候得共、世間ニてハ如何風聞仕候哉、委ク申訳も難相成、難義至極ニ奉存候、殊ニ生涯之義ニ御座候得者、右之間ニ相果候者も有之、私共迎も老年之義落命難斗奉存候、既ニ上黒田村新助杯、去巳ノ年相果候得者、世忤へハ御扶持ハ不被下置、最早何之親族も無之、私共も右同様末々年歴ヲ経候ハ、人々之雜談ニも先年御領分中ニ被敵対候者之子孫と申ス惡名ハ残り候得共、功名ハ難相立、御上御憐愍之御扶持頂戴仕候者と申義ハ相知れ不申、子孫面目難相立可有之候哉、眼前ニ而是□歎敷奉存候、此節御入用御多分之御中、達而右之御扶持米之儀者奉願上候ニ而も無御座候、縱令何等之御義ニて成共、末々人前相立候様ニ□、此上之御慈悲と被思召御勘弁奉願上候、兼々御憐愍之上以多筆奉申上候義、恐多奉存候得共、最早老後落命候事ニ逼り申候間、不願恐ヲ奉願上候、偏御慈悲を以此上御執成被下置候ハ、難有仕合奉存候、以上

安永五年

史料12は、内容から史料10・11と同時期に作成されたと思われるが、新助の子甚右衛門の名前が出てこない点に特徴がある。内容としては、「御扶持米」によって身分が立ち、それによって「私曲之筋」が無かったと「世評」も絶え、かつ「遺恨」も晴れてきたとし、「御扶持米」の借り上げ、さらには「御扶持米」が一代限りであること

で、「世間」の風聞や子孫への「悪名」が残ることへの危惧を述べて、「御扶持米」ではなく「何等之御義」を求めており、大枠の構成は史料10・11と同じである。

ここでは「世間」の風聞や子孫に面目が立たないことが述べられているように、「何等之御義」を要求する理由は「外聞」とされており、史料11のように「遺恨」は強調されていない。しかし、年を経て「御上御憐愍之御扶持頂戴仕候者」ということは忘れられ、「御領分中ニ被敵対候者之子孫」という「悪名」が残ると述べており、「御領分中」と「敵対」した記憶が残ることに危惧している点には注目したい。ここでも一揆参加者との対立に言及しており、この点は史料11の「一同敵々ニ罷成意魂心底ニ差挟罷在候得共」と通じるものがある。このような「遺恨」や「敵対」への危惧は一揆直後の願書では見られず、今回（安永期）の願書において新たに主張されている点は見逃せない。換言すれば、安永期になって一揆参加者との対立が問題化されはじめたといえるのである。史料11では、子孫の代に至って「不法致候者」が出来し、彼らが「御咎」を受けることによって、さらに「遺恨」が積み重なっていくことへの憂慮が述べられているが、こうした具体性のある想定がなされている点に、打ちこわし被害者たちが実際にそのような事態を危惧していた様子が読み取れるのではないだろうか。

ところで、前述したように、史料12の作成主体は、あくまで甚右衛門以外の四人からの願書である点に特徴がある。これに対し史料10・11は甚右衛門からの願書であるが、この二つの願書にも文章構成には少なくない異同が指摘できる。史料10・12の作成時期の前後関係は不明ながらも、これらの願書からは、打ちこわし被害者たちが藩から「何成とも御印」・「何等之御義」Ⅱ「子孫永久御威光」を獲得するために奔走していた様子が浮かび上がってくる。

では、打ちこわし被害者たちは、なぜそこまでして「御威光」の獲得を目指したのだろうか。ここまで縷々述べ

てきたように、打ちこわし被害者たちは一揆直後から「外聞」を気にしており、さらに安永期の願書からは「遺恨」への危惧が読み取れるのである。こうした打ちこわし被害者たちの意識と行動の背景を考えるために、次節では千人講騒動後の地域社会の様子を確認してみたい。

## 五 地域社会に残る打ちこわしの記憶

ここでは千人講騒動後の地域社会の様子について、百姓一揆物語を素材に確認してみたい。百姓一揆物語とは、〈その後〉の村や地域で作成された「一揆についてのまとまったイメージを提供しようとしている記録作品」<sup>(30)</sup>で、主として一八世紀半ば以降に作成された、ほぼ同一の内容・形式・表現様式を持つ物語のことである。<sup>(31)</sup>

千人講騒動については、管見の限り三種類の百姓一揆物語が確認できる。<sup>(32)</sup>これらの物語では、千人講騒動の発端から経過が詳述されており、その中で打ちこわし被害者たちに関する記述も多く見られる。

最初に「き、書之覚」という表題をもつ百姓一揆物語を紹介したい。<sup>(33)</sup>この物語は千人講騒動の発端が記された冒頭の箇所、「会之節支配致取集取候人数」として「在郷会行司」の名前が列挙されており、そのうち上郷の「会行司」として「黒田村庄屋仙左衛門、同村同断新助、座光寺村同断七左衛門、市田村同断与右衛門、同村同断平九郎」<sup>(34)</sup>（三九一―三九二頁）の五人の名前が列挙されている。そのうえで上郷の打ちこわしの場面では次のように記述されている。

### 【史料13】

（前略）一、先達一騎徒党せし上郷暫者指控たりと雖、猶不得止事、猶又一味して座光寺原集る、早明四ツ時下黒

田村庄屋仙左衛門宅へ押寄、但シ下郷ぢくり為を意根<sup>(意根)</sup>ニや思ひける、手新に打ひしグ、散々微塵に打くだき、時之音天地震動し、それより上黒田村新助宅を打破、それより町へ押込、(中略)此時集人凡下郷追手へ相詰之人数程也、それより引別、式分余りは市田村・座光寺村右之庄屋を打破に参る、右三庄屋御構役人故<sup>(意根)</sup>、又は村々一党無之故也(後略)(二九三頁)

ここでは、下黒田村庄屋仙左衛門の打ちこわしについて、「下郷ぢくり為」⇨下郷の強訴の動きを藩に注進したことが「意根<sup>(意根)</sup>」となって打ちこわされたことが、「評二曰く」の形式で註記されている。また下市田村庄屋与右衛門・平九郎と、座光寺村庄屋七左衛門の打ちこわしについては「右三庄屋御構役人故<sup>(意根)</sup>、又は村々一党無之故也」と打ちこわされた理由が記されている。これらが打ちこわしの実際<sup>(意根)</sup>の理由であつたかどうかは不明だが、このように打ちこわしの理由が記述されることで、打ちこわしの正当性⇨打ちこわし被害者の不当性が明示されていたことがわかる。こうした打ちこわしの場面については、その他の百姓一揆物語でも次のように描かれている。

#### 【史料14】<sup>34)</sup>

(前略)扱村々一度ニ高松原江寄合、無評定も下黒田村庄屋仙左衛門江と押寄、どつと一度ニ声ヲ上ル、皆々驚キ村々罷出仙左衛門ニ向申けるハ、段々千人講ニ付御取持御苦勞千万ニ候段々御礼ニ今日御見舞申候と申けれハ、庄屋仙左衛門申けるハ皆々様様被遊御出被下忝存入候、御酒ヲあがり被下候と申けれハ、今時何之酒どこです有御座間敷いゝをあいづにどつと一度ニ踏刻シ家内之者ちかくに逃ニけり、仙左衛門しんしよるけれハ家と申諸道具又は衣類等満ちくゝにありけれども不殘踏刻シ、又上黒田村庄屋新介所も如此ニ踏刻シ、座光寺村七左衛門、下市田村与右衛門、同村平九郎右五人之者ハ同様成役踏刻シ(後略)

【史料15】<sup>35)</sup>

(前略) 明六ツ時ニ上郷壱万石之百姓数千鯨波を作り座光寺原江押寄せ、兼而代官谷田部礪右衛門、手代大沢与太夫、佐々木庄八郎乗入く、達而被相止候へ共不聞入、止事不得して懸り、下黒田村庄や仙右衛門江押寄、廿三日朝五ツ時家、道具、土蔵、衣類等不残打破り、夫より上黒田庄や新助を右同断打破り(中略) 夫より大横町三保や与市江押寄せ、家、諸道具打破り、夫より座光寺村庄や七左衛門江行、家、諸道具散々打破り、夫より市田村庄屋式軒打破り(後略)

それぞれ「郷訴記」(史料14)、「信州飯田之領主堀大和守様百姓騒動之事」(史料15)という表題を持つ百姓一揆物語である。この二つの物語では史料13のように打ちこわしの理由は明記されていないが、史料14には「千人講に付御取持御苦勞千万」とあるように千人講の世話人であったことが暗に示されている。打ちこわしの場面では、家や諸道具など打ちこわされた場所や物などが具体的に記されるときに、史料14では下黒田村仙左衛門と一揆勢との掛け合いが調子よく描写されるなど、打ちこわしの場面は脚色を織り交ぜながら具体的に描かれている。

こうして千人講騒動後に作成された百姓一揆物語には、それぞれ誰が打ちこわされたのか、打ちこわし被害者の名前や打ちこわし時の様子、さらには打ちこわし被害者の不当性までもが具体的に記されていたことがわかる。そのうえで注目したいのは、「信州飯田之領主堀大和守様百姓騒動之事」の末尾に次のような狂歌が記されていることである。

【史料16】<sup>36)</sup>

郡奉行 黒田楠右衛門<sup>(須)</sup>

くすくともゆる思ひの百姓が 一騎おこればせんきくづる、

代官 小林茂次右衛門

小林を出るとかけりし猪も せこにおわれてよじり茂次右衛門

千人講会所 竹丸屋半兵衛

せん人のあかでこゑんと竹丸や ふとらぬ内になから半兵衛

上黒田村庄屋 篠田新助

住なれし篠田之家をつぶされて 今は新助も浦み楠のは

蚕種問屋 米や太兵衛

産神のうらみのかすはを、けれど 子種之米やむくふ太兵衛

本町 坂屋藤次郎

側杖にあふとおもへばむね板や まづあきないも当時なるまい

知久町 南部屋清藏

わるい事したるおほへはなけれ共 かゝる時節にあふも楠部や

目明シ 三保屋賀藤太

目あかしといわるゝみおやもちなから かゝる多せいになんと加藤太

さくら町 油屋三重

百姓がのりじりにきおる三重の 家ざいくたかれうれい三重

下黒田村東庄屋 仙右衛門

村かりて千座のこまつにまつ黒田 灰も家財も捨つる川底

市田村久保庄屋 橋爪与右衛門

時の声あげて寄ると聞とはや 身も与右もたへくるふ橋爪

座光寺村欠の庄屋 七左衛門

ぐわた／＼と言とかけのハ七左衛門 ひゞきに人はおどろきにけり

市田村庄屋上市場 平九郎

つぶされた得は家財も平九郎 いんきよの得もわろうへからず

山村百姓 車屋孫右衛門

よしあしのうそを穀屋の孫右衛門 いんぐわは早くめぐる車屋

ここでは郡奉行黒須楠右衛門をはじめとして、町方・在方の千人講の関係者や打ちこわし被害者など一四人に関する狂歌が記されているが、そのうち上黒田村庄屋新助など上郷の打ちこわし被害者五人の名前を確認することができる（傍線部分参照）。彼ら五人に対する狂歌は、いずれも打ちこわされたことを揶揄するものである。特に、仙左衛門と平九郎の狂歌では「家財」や「得」が潰されたことが詠まれており、「私欲」が嘲笑されている点には注目したい。

ところで、これらの百姓一揆物語は、例えば史料13の百姓一揆物語には表題の異なる同一内容の物語が存在し、ともに旧下郷に属する地域で残されていることから、人びとの間で筆写され、広汎に流布されていた様子が推測できる。実際に、史料15は文化一五年（一八一八）五月に筆写されたものであることが確認できる。また史料14については作成年代は不明だが、上郷の南条村庄屋浜島伝右衛門永久が、嘉永元年（一八四八）に飯田藩主親審の死去に際して読み直していたことが確認できる。つまり、千人講騒動の百姓一揆物語が約一〇〇年を経た（その後）の

地域社会において読み継がれていたことになる。このように百姓一揆物語が読まれ、写されることによって、千人講騒動が〈その後〉の地域社会の記憶として残されていたと考えられる。<sup>(38)</sup>

こうして千人講騒動後の地域社会では、打ちこわし被害者が嘲笑の対象とされており、かかる打ちこわしの記憶が百姓一揆物語を介して再生産され続けていたことがわかるだろう。このような地域社会の動向が、打ちこわし被害者たちをして藩に褒賞や「御威光」を求める社会的背景になっていたのではないか。本稿では、彼らが「外聞」や「遺恨」を気にせざるをえない背景に、打ちこわしをめぐる嘲笑や記憶の再生産といった地域社会の動向が存在していたと考えておきたい。

## おわりに

千人講騒動後の地域社会では、打ちこわしを受けた上郷の上黒田村新助など五人の庄屋たちが、一揆直後から藩に「不参加者」として、さらには「打ちこわし被害者」として訴願行動を展開していた。打ちこわし被害者たちは加害者の処罰も求めていたが、彼らの主たる要求は褒賞による身分的な保障であった。打ちこわし被害者たちは共通して「私欲之筋」が無かったことを強調しており、地域社会における「外聞」を気にしていた。打ちこわし被害者たちの行動の基底には、打ちこわされたことを不名誉とする「家」意識が存在したのである。

これに対して藩では「一生之間式人扶持」を与えており、打ちこわし被害者たちの要求が藩をして「扶持」を引き出させる結果になったと考えられる。その後、安永元年に「扶持」の借り上げが申し渡されると、再び訴願行動が展開された。安永期の動向として注目されるのは、打ちこわし被害者たちは藩に「扶持」を求めるのではなく、

もはや何でもよいから「子孫永久御威光」を求めていたことである。この過程で打ちこわし被害者たちは複数の願書を作成しており、そこからは彼らの強かな姿―打ちこわし被害を前面にして藩から特権を得ようとする―が看取できる。しかし留意すべきは、そこでも打ちこわし被害者たちの行動の基底には「家」意識が存在したことである。

このように打ちこわし被害者たちが褒賞や「御威光」の獲得を目指した社会的背景には、打ちこわしをめぐる地域社会の動向が指摘できる。千人講騒動後の地域社会では、数種類の百姓一揆物語が作成され、そこでは打ちこわしの具体的な様子や打ちこわし被害者たちの不当性が記述されていた。なかには打ちこわし被害者を揶揄する狂歌が載せられており、彼らの「私欲」が嘲笑されていた。千人講騒動後の地域社会では打ちこわし被害者が嘲笑の対象とされていたのである。また、これらの百姓一揆物語は近世後期まで読み継がれており、百姓一揆物語を介して打ちこわしの記憶が再生産され続けていたことが指摘できる。かかる地域社会の動向が、打ちこわし被害者たちの意識と行動を規定していたのではないかと考えられる。

百姓一揆物語については、若尾政希氏によって「仁政的秩序を、領主―民の関係意識を結び直す機能を持っている」<sup>39)</sup>ことが指摘されているが、本稿で見てきた打ちこわし被害者の立場からすると、そうした機能とはまた別の側面が見えてくる。打ちこわし被害者たちからすれば、百姓一揆物語とはまったくもって「名誉毀損」な書物であったろう。地域社会における百姓一揆物語の広がりやその享受・機能のあり方を考えるうえで、打ちこわし被害者の存在は軽視できない問題となるのではないだろうか。<sup>40)</sup>

ところで、褒賞や「御威光」を求める打ちこわし被害者たちの行動は、藩への接近を図るものであり、打ちこわした側の百姓からすれば、決して面白いものでは無かったと思われる。安永期の願書において打ちこわし被害者た

ちは、地域社会における対立（「遺恨」）を強調していた。それは願書のレトリックである可能性も否定はできないが、打ちこわし被害者たちの褒賞や「御威光」を求める行動が、結果として百姓一揆時の対立を「遺恨」として地域社会に残していくことになったという面もあるのではないか。安永期の願書において打ちこわし被害者たちが「遺恨」を問題化しはじめたのも、「扶持」獲得後の打ちこわし被害者と地域社会との関係として捉える必要があるのではないかと考える。

以上、本稿で明らかになったのは、百姓一揆後の地域社会において、打ちこわされたことを「家」の不名誉として、褒賞や「御威光」の獲得に奔走した打ちこわし被害者たちの姿である。ここで重要なのは、打ちこわされたという経験が「家」意識と深く結び付いていたことである。これにより打ちこわし被害者の「家」に打ちこわしの記憶が残され、〈その後〉の彼ら（ないしは子孫）が村や地域社会に対峙する際の態度や行動のあり方に影響を与えた可能性が考えられるのではないか。<sup>42</sup>これが打ちこわしの「掣肘」のメカニズムといえるだろう。

ただし、打ちこわしを不名誉とする「家」意識が、一方で打ちこわしの被害を前面に出して褒賞や「御威光」の獲得といった藩との接近を生んでおり、それによって地域社会における対立（「遺恨」）をより深刻化させる可能性もあったことは否定できない。本稿の事例からは、むしろこちらの側面が浮かび上がってくるのである。

百姓一揆が〈その後〉の人びとに与えた影響については、戦後歴史学において階級闘争史・人民闘争史の観点から「一揆の伝統」（例えば「不服従の抵抗」<sup>43</sup>）が注目されてきたが、村落史・地域社会論との関係に重点を置くならば、本稿で検討してきた百姓一揆後の「外聞」や「遺恨」という問題が〈その後〉の人びとの関係性や村・地域社会のあり方に及ぼした影響を問う必要があるのではないか。<sup>44</sup>こうした問題は、村や地域の視点から「百姓一揆とは何か」を問い直すことにも繋がる重要な問題であると考ええる。この点の具体的な検討は今後の課題とせざる

を得ないが、本稿では、百姓一揆後の地域社会において打ちこわし被害者たちが「外聞」と「遺恨」をめぐる繰り返し訴願行動を展開していた点に、いわば「後遺症」ともいえる百姓一揆の社会的影響の一端を見出しておきたい。

# 註

(1) 本稿と同じ問題関心のもと、これまで私は百姓一揆の〈その後〉に注目して、被処罰者や費用負担、義民に関する問題を検討してきた。詳細は以下の拙稿を参照されたい。①「百姓一揆の保障システムとその変容―南奥羽を中心に」(安達宏昭・河西晃祐編『講座 東北の歴史Ⅰ 争いと人の移動』清文堂出版、二〇二二年)、②「義民をめぐる地域社会の相克―安政六年信州南山一揆の歴史的位置」(『信濃』六四巻二号、二〇二二年)、③「百姓一揆という罪科の記憶―宝暦一二年飯田藩千人講騒動の〈その後〉」(『日本史研究』七〇六号、二〇二一年)、④「百姓一揆後の村と費用負担―文化六年信州飯田紙問屋騒動を事例に」(『地方史研究』四二二号、二〇二三年)。

(2) この点は、村落史の立場から民衆運動史への接合を試みている渡辺尚志氏の研究から示唆を得ている(渡辺尚志『日本近世村落論』岩波書店、二〇二〇年)。なお、本稿の課題設定およびその研究史上の位置づけについての詳細は前掲註1拙稿「百姓一揆という罪科の記憶」を参照されたい。

(3) 深谷克己「近世政治と百姓目安」(岩田浩太郎編『民衆運動史2 社会意識と世界像』青木書店、一九九九年)九、三五―三六頁。

(4) 打ちこわしの正当性観念については、岩田浩太郎『近世都市騒擾の研究』(吉川弘文館、二〇〇四年)参照。

(5) 落合延孝「フォークロアから運動へ」(藪田貫編『民衆運動史3 社会と秩序』青木書店、二〇〇〇年)。

(6) 落合延孝「世直し」(『一揆2 一揆の歴史』東京大学出版会、一九八一年)、同「世直しと質物の返還」(『群馬大学教養部紀要』二三巻、一九八九年)など。

(7) 今村直樹「農民一揆後の「付け火」と近代移行期の地域秩序」(『史料』九七巻六号、二〇一四年)。

(8) 保坂智「百姓一揆と義民の研究」(吉川弘文館、二〇〇六年)一〇〇頁。

(9) 前掲保坂書、二七九頁。

(10) 百姓一揆後の村における人びとの関係性に関する研究はほとんど行われていないが、数少ない成果として、小椋喜一郎「百姓一揆における「個」と「集団」(『保坂智編『民衆運動史』一揆と周縁』青木書店、二〇〇〇年)がある。小椋氏は宝暦郡上一揆を素材に、「立者」・「寝者」、集団と個の関係から、一揆不参加者(「寝者」)の(その後)の生活が困難であった様子を明らかにしている。そのうえで、郡上一揆において一揆後に「寝者」側が代官に訴状を出した事例が多いことを挙げ、「一揆における分裂の後遺症によって村落共同体の運営が破綻に瀕していた状況を示すものである」と指摘している(七四頁)。小椋氏の研究は、打ちこわしの被害者・加害者の(その後)を考えるうえで示唆的である。

(11) なお、この点でいえば、民俗学の立場から地域における打ちこわしの「暴力」の語られ方を検討して、打ちこわしが「一揆後社会のなかに加害・被害という著しく異質な社会関係を生起させた」ことを指摘した、渡部圭一「暴力と破壊のフォークロア―武州世直し一揆における暴力的身体ゆくえん」(瀬戸邦弘・杉山千鶴編『近代日本の身体表象』森話社、二〇一三年)は重要な成果である。本稿は、百姓一揆後の「加害・被害という著しく異質な社会関係」の一端を、打ちこわし被害者の意識と行動に即して明らかにしようとするものである。

(12) 以下、千人講騒動については、註記の無い限り、拙稿「小使・「強勢者」・若者―一七六二年千人講騒動の再検討」(『伊那』九五七号、二〇〇八年)参照。

(13) 打ちこわしの軒数については、「き、書の覚」(後述)と「信州飯田之領主堀大和守様百姓騒動之事」(後述)の二つの百姓一揆物語では、本町山村屋善十郎方も含め一四軒とされている。しかし、藩の公的な記録の写しと推測される「宝暦十二年百姓共強訴一件抄」では、一三軒である(飯田市熊谷操氏所蔵文書・飯田市歴史研究所近世写真帳四二一)。以下、本稿では「宝暦十二年百姓共強訴一件抄」に基づき一三軒とする。

(14) 宝暦一二年四月「乍恐口上書を以奉願上候御事」(飯田市三日市場清水貞男氏所蔵文書、飯田市歴史研究所近世写真帳一七三一―一五)。

(15) 宝暦一二年五月「申渡之事」(飯田市鼎新井家文書、飯田市歴史研究所近世写真帳一八一―一二)。

(16) 宝暦一二年五月「申渡之事」(飯田市座光寺北原氏所蔵文書、長野県立歴史館「長野県史写真版資料」四・飯・騒／二―一二)。

(17) 以下、打ちこわし被害者たちの提出した願書とその概要については、『上郷史』(上郷史刊行会、一九七八年、五六〇―五六一

頁) および小林孤灯「歴史小説 千人講と大門の新助 一・二」(『伊那』一九六二年二、三月号) で一部紹介されている。特に小林氏の論考は「歴史小説」ではあるが、打ちこわされた上黒田村新助家に残された文書が翻刻・紹介されており貴重である。ただし、いずれも史料紹介の域を出ていない。本稿ではこれらの成果をふまえつつ、新出史料を加えたうえで、打ちこわし被害者の意識と行動を考察していくこととした。

(18) 宝暦二年三月「乍恐以口上書奉願上候御事」(『長野県史』近世史料編四(三)、一九八三年) 三七九―三八〇頁。

(19) 宝暦二年三月「乍恐以口上書奉願上候御事」(飯田市篠田敏道氏所蔵文書、飯田市歴史研究所近世写真帳一九〇三―二)。

(20) 宝暦二年三月「乍恐書付を以奉願上候」(飯田市座光寺北原文武氏所蔵文書、長野県立歴史館「長野県史写真版資料」四・飯・騒／二一五)。

(21) 「奉願上候口上之覚」(飯田市篠田敏道氏所蔵文書、飯田市歴史研究所近世写真帳一九〇三―一九)。

(22) 明和一年二月「申渡之事」(『長野県史』近世史料編四(三)、一九八三年) 三九六―三九七頁。

(23) なお、打ちこわし被害者たちが共通して「親類」を気にしていた点には少し注意が必要である。萬代悠氏は近世の「家」制度では家長が「家族・親類から不断の監視と牽制を受け、絶えず家長としての地位を脅かされた」ことを指摘しており、近世社会においては「家」制度のもと家長の行動が監視・拘束されていたことを論じている(萬代悠「畿内豪農の「家」経営と政治的役割」『歴史学研究』一〇〇七号、二〇二一年)。打ちこわし被害者たちの意識と行動を理解するうえで、萬代氏の指摘する「家」制度の拘束性は考慮する必要があるだろう。

(24) 安永元年一〇月「申上候口上」(飯田市上郷上黒田篠田重雄氏文書、長野県立歴史館「長野県史写真版資料」四・飯・騒／四一九)。

(25) この時の「御類焼」が藩の上屋敷であることは、後述の史料11から判明する。

(26) 安永五年一〇月「乍恐以口上書奉願上候御事」(下伊那郡高森町下市田中村藤雄氏文書、長野県立歴史館「長野県史写真版資料」四・飯・騒／四一〇)。

(27) 甚右衛門については、安永二年から上黒田村の庄屋に就任し、この時点でも庄屋に就任している(『上郷史便覧』所収「首長(五か村庄屋戸長町村長) 一覧」(『上郷史』上郷史刊行会、一九七八年) 参照)。

(28) 安永五年一〇月「乍恐以書付奉願上候御事」(飯田市上郷上黒田篠田重雄氏文書、長野県立歴史館「長野県史写真版資料」四・

飯・騒／四―一）。  
飯・騒／四―一）。

(29) 安永五年「乍恐口上書を以奉申上候」（飯田市篠田敏道氏所蔵文書、飯田市歴史研究所近世写真帳一九〇三―八）。

(30) 安丸良夫「二揆記録の世界」（『日本ナショナリズムの前後』朝日新聞社、一九七七年）。

(31) 若尾政希『百姓一揆』（岩波書店、二〇一八年）。

(32) 千人講騒動の百姓一揆物語については、前掲註1拙稿「百姓一揆という罪科の記憶」参照。

(33) 「き、書の覚」（『長野県史』近世史料編四（三）、一九八三年）三九一―三九四頁。以下、本史料の引用は本文に頁数を示す。

なお同書は、別の表題（「飯田百姓一揆之事」、飯田市清水貞男氏所蔵文書、飯田市歴史研究所近世写真帳一七三―一二）で流布されていたことが確認できる。

(34) 「郷訴記」（飯田市飯沼浜島家所蔵、『飯田市美術博物館文書目録（Ⅵ）』（二〇〇一年）収録の同家文書整理番号一七九八）。

(35) 「信州飯田之領主堀大和守様百姓騒動之事」（飯田市時又今村東一郎氏文書、飯田市歴史研究所近世写真帳一〇八―三）。

(36) 平沢清人「信州飯田藩宝暦の千人講騒動」（『信濃』一一巻八号、一九五九年）所収。なお、この史料については、前掲註35

「信州飯田之領主堀大和守様百姓騒動之事」では油屋三重までの狂歌は掲載されているが、それ以降のものについては確認できない。一方で、平沢氏は本史料が「時又大東 今村氏蔵」の「下郷百姓の手記」（厳密には「竜丘村誌筆写史料」を利用）に掲載されているものとして紹介しており、その内容から「下郷百姓の手記」とは前掲註35であることが確認できる。同じ内容の百姓一揆物語が二冊あり、一方には「油屋三重」までの狂歌が記され、もう一方にはそれ以降の狂歌も記されているのか、それとも前掲註35の写真版が一部未収録なのか、現時点では定かでない。原本での確認ができないため、本稿では平沢氏論考所収の狂歌を利用した。

(37) 前掲註33「飯田百姓一揆之事」。

(38) 百姓一揆物語と（その後）の地域社会における集合的記憶の形成については、須田努「人斬りの村から」〔GYRATY②〕四号、二〇〇七年）、同『幕末の世直し 万人の戦争状態』（吉川弘文館、二〇一〇年）、同「自助と自浄の一九世紀」（『人民の歴史学』一九五号、二〇一三年）参照。

(39) 前掲註31若尾書、一九八頁。

(40) 百姓一揆物語をめぐるのは、百姓一揆の（その後）の実態をふまえた個別分析が必要と考えているが、同時により幅広い視野

から享受のあり方を検討することも不可欠である。この点で、鈴木凜「近世後期における「義民物語」の伝播・受容―「佐倉惣五郎」を事例に」（『書物・出版と社会変容』二五号、二〇二〇年）は、最近の書物史研究の成果をふまえ、佐倉惣五郎物語と訴訟知（村役人の力量）の問題を関連付けた検討を試みており注目される。

- (41) 例えば、上黒田村新助家では、前掲註17小林「歴史小説 千人講と大門の新助二」に、「庭の老松を指さしながら当主篠田重雄氏は語る。「この松なども太い井戸縄（昔、釣り井戸に使った縄）を巻きつけ、数百人の人たちが、ときの声をあげながら根こぎにしたという伝説が残っております」と記されており、昭和三七年（一九六二）時点で、打ちこわしに関する「伝説」が残されていたことが確認できる。

- (42) 上黒田村新助家は近世後期まで庄屋役を務めていることが確認できることから（前掲註27「上郷史便覧」）、本稿の成果をふまえたうえで、〈その後〉の上黒田村の村運営のなかで「掣肘」の問題を検討していくことが肝要であると考えている。

- (43) 山田忠雄『一揆打毀しの運動構造』（校倉書房、一九八四年）一九八頁。

- (44) 例えば、座光寺村七左衛門は、安永七年九月に隠居して、庄屋役を交代している（『座光寺村史 別冊年表』座光寺村史刊行委員会、一九九三年、一一頁）。安永五年の訴願行動と時期が近似することからして、その交代の要因が検討課題となるだろう。なお、座光寺村については、近年、社会構造分析が進められており、そうした成果との接合も意識する必要があるが、今後の課題である（羽田真也「近世座光寺村の組と家」（『飯田市歴史研究所年報』一八号、二〇二〇年など）。